

## アトランタで体感した異文化

神戸大学 横川博一



青い空、そして日本よりいくぶん快適な空気を肌に感じながら、私はアメリカ、ジョージア州・アトランタに降り立った。今年の3月はじめのことであった。

「私、今度、学会でアトランタに行くんですよ。」

「じゃあ、南部に行かれるんですね。初めてですか？」

私はこの同僚の何気ない一言にはっとした。そう、南部は初めてだ。「よく知っている」はずのアメリカだが、そんな地理的感覚にさえ鈍感な自分を恥ずかしく感じた。

しかし、そのおかげで、アトランタがいったいどんなところなのか、この肌で体感してこようという興味と好奇心は一気に高まった。

私は、「I have a dream」の演説で有名なキング牧師の歴史資料が展示されているKing Centerを訪れた。教科書などでは描かれることの少ない公民権運動時代の彼の活動が、年代を追ってパネルで詳細に紹介される。いかに困難を伴ったものであったのか、足早に通り過ぎることのできない史実に、しばし呆然と立ち尽くす。そのとき彼を支えたものは、暴力では何も解決できない、という信念であった。

世界最大のコーラ博物館、World of Coca Colaにも足を伸ばした。ここでは、世界のコーラのうち、約70種類が試飲できる。

「あっ、これおいしい！」

「うわっ、これまずい！」

私も思わず、みなと一緒にになって、はしゃいでしまった。しかし、考えてみれば、味覚ほど個人差の甚だしいものはない。国や文化によって、これほどまでに違った味の



コーラが飲まれているという事実に、文化の多様性とその理解がいかに乏しいかを私は感じる事となった。

私は、滞在中に誕生日を迎えた。これを皆が祝ってくれたのだが、レストランを出ると、それを察知したstreet musician風の男性がHappy Birthday!をギターで演奏してくれる。信号を待っていると街角のpolicemanが「誰の誕生日？」と尋ねてきて、Happy Birthday!と、そのあたりの人も巻き込んで祝ってくれる。私のAfrican-Americansに対するイメージは、がらりと変わった。いや、本当の姿に自分のイメージがようやく追いついたのかも知れない。

とにかく、アトランタの人はみな陽気だ。そして、みな親切だった。これを、Southern Hospitalityと言うのだと知ったのは、帰国後のことだ。しかし、まさにそれを体感した一週間であった。

表紙写真  
について

## We Don't Climb

星美学園中学高等学校 田嶋 美砂子

シドニーで搭乗した飛行機がウルルに向け、出発した。3時間強の飛行を経て、そろそろ到着かという頃、機内のモニターにはウルルカタジュタ国立公園を紹介するビデオが映し出された。目に入ってきたのは「We Don't Climb」の文字。しばらく見ていると、それは国立公園内やその周辺に居住する先住民アナングがウルル登山を計画する観光客に向け、「登らないでほしい」と訴えるメッセージであることがわかった。

ウルルを聖地と考えるアナングは環境・水・遺産・文化省のサイト\*内で、観光客のウルル登山について次のように述べている。“The climb is not prohibited, but we prefer that, as a guest on Anangu land, you will choose to respect our law and culture by not climbing.”（「登山は法律で禁止されているわけではありません。しかし、アナングの土地の訪問者であるあなた方には、登らないことによって私たちの慣習や文化を尊重してほしいと願っています。」）

このような呼びかけに対し、「登ってほしくないのであれば、なぜ法律で禁止しないのか」と問う人々がいる。この問いには「渋々ながらも登山を許容することで観光客を惹き付け、結果として利益を得ているのだから、文句は言

えないのではないか」という含みがある。確かに、国立公園の所有権を持ち、政府と賃貸契約を結ぶアナングは年間リース料に加え、観光客が支払う国立公園入園料の25%を手に入れている。オーストラリアの低賃金所得者層を構成する彼（彼女）らにとってこれが大きな収入源となっている事実は否定できない。とはいえ、彼（彼女）らが現状に甘んじ、呼びかけ以外の行動を起こしていないと考えるのはやや性急な判断である。

実のところ、アナングは昨年7月、登山禁止を盛り込んだ新しい国立公園運営計画案を発表している。しかし、それを最終的に否決したのは政府であった。観光業界に配慮してのことである。過去の非人道的な先住民政策に対し、初めて公式に謝罪したラッド首相でさえ、登山禁止に話が及ぶと反対の意を表す。この問題にはオーストラリアの歴史的、社会的、政治的、経済的な諸事情が複雑に絡み合っている。

さて、シドニーでまとめた私の荷物には滑り止め付きの軍手が入っていた。観光客の登山を快く思わない先住民がいると耳にした記憶はあったものの、寡聞にしてそれ以上の情報は持っておらず、登るつもりでいたのである。ウルルの麓に置かれた看板に「We Don't Climb」の文字を再び見つけたとき、私は登山ではなく、周辺散策を選んだ。

\*Department of the Environment, Water, Heritage and the Arts  
(<http://www.environment.gov.au/parks/uluru/visitor-activities/do-not-climb.html>)